

チャの新規害虫「ミカントゲコナジラミ」の発生

平成18年10月、奈良県の茶園にミカントゲコナジラミが発生しているのが確認されました。この害虫は海外ではチャの害虫として知られていますが、日本ではミカンの害虫で、チャでの発生は認められていませんでした。その後県内の茶園を調査したところ、発生地域の拡大に加え、密度の急速な高まりが認められ、問題となっています。この害虫のチャでの被害や防除対策など不明な点が多いことから、以下の調査をおこないました。

1. 形態

卵は下葉の葉裏に生み付けられ、幼虫、成虫と成長します。成虫は体長約1.3mmで小型のハエの形をしており、活発に飛び回ります。



図1 幼虫



図2 成虫

2. 被害

幼虫が葉を吸汁加害し、付随的にすす病が発生するため、葉が黒くよごれます。またきわめて大量に発生するため、農家の方は成虫を吸引しないよう、収穫等の作業時にマスクやメガネが必要となります。

3. 農薬の防除効果

農薬の効果試験をおこなったところ、農薬の付着した幼虫に対しては高い防除効果が認められ（表1）、外観上すす病の発生も低く抑えられました。

表1 薬剤防除とミカントゲコナジラミの寄生頭数（頭/葉）

	卵	1 齢幼虫	2 齢幼虫	3 齢幼虫・蛹
薬剤防除区	49.9	1.4	1.4	0.1
無防除区	56.2	9.7	9.7	18.5

6/11 アプロードエース（1000 μ g/10a）

6/25 ハチハチ乳剤（400 μ g/10a）

7/9 調査、一番茶最上位残葉調査

しかしながら成虫の発生はあまり抑制されず、次の世代には回復しました（図3）。この原因として、害虫の生息部位が下葉の葉裏であるため薬剤が付着しにくく、完全に防除しきれないこと、また増殖力が極めて高いため密度回復が早いことによるものと思われます。

以上のことから、この害虫防除は農薬だけでは難しいことが判明しました。今後、農薬の種類や効率的な散布時期を検討すると共に、天敵調査とそれら天敵に影響の少ない防除技術を検討し、被害を最小限にとどめる防除体系を組み立てたいと考えています。

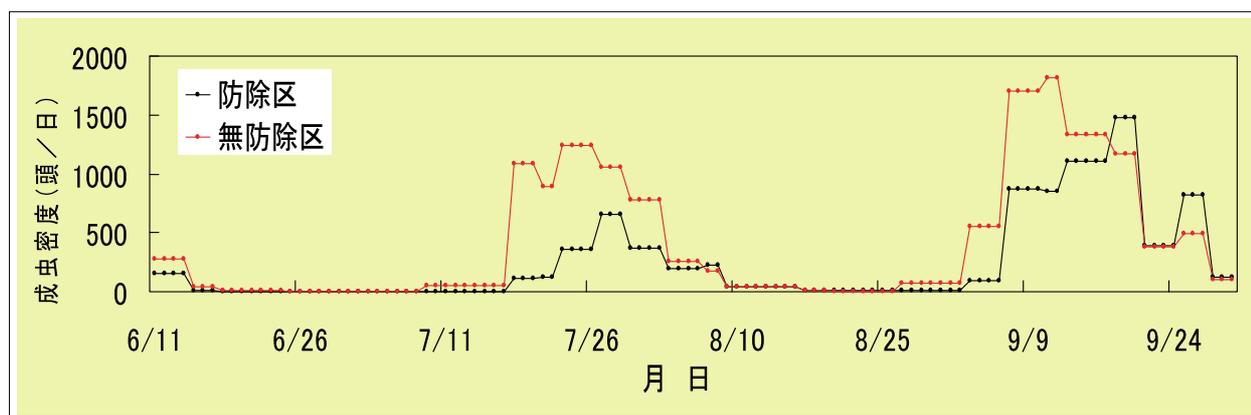


図3 薬剤防除が次世代成虫発生に及ぼす影響

（注）黄色粘着トラップでの数値

（栽培加工チーム 堀本圭一）